「こういうことや」「そういうことか」

昨年に引き続き今年も藤田徹文先生のご自坊を訪問しました。
「仰真会」と命名されたこの会の中心的な存在であった利井明弘先生（常見寺住職・行信教校校長）が、昨年十二月に講演先のホテルで亡くなられたため、当日は会に先立って本堂で追悼法要が勤められました。

お勤めの後、藤田先生が次のようなお話をされました。

「利井先生とはもうかれこれ四十年近いお付き合いになります。お浄土に帰られた先生を偲ぶ時、今、無性に思い出されることがあります。
先生は十数年前、弟の雪山隆弘さんをガンで亡くされました。亡くなる数日前、弟さんから先生に電話があり、『兄貴、こういうことや』と言われたそうです。それを聞いた先生は『そういうことか』と返事をしたというのです。電話での会話はそれだけだったそうです。
私も今、利井先生に言いたい。余りにも突然の死に『どういうことや』と。恐らく先生は『こういうことや』と答えられるだろうと思います・・」

先立っていく者と見送る者、夫々の深い悲しみを思う時、本当に心が痛みます。

「こういうこや」「そういうことか」
この短い会話の中に私は、共に念仏者として生きてきた信の証を見る思いがしました。

お寺の次男として生まれた雪山さんは、早稲田大学卒業後、産経新聞の社会部記者、夕刊フジの報道部記者、ニッポン放送のパーソナリティーとして活躍された後、縁あって奥様の実家のお寺（浄土真宗本願寺派・善巧寺ー富山県宇奈月町））を継ぐことになります。
入寺後は持ち前のバイタリティー溢れる行動力と卓越した手腕で見事な寺院活動を繰り広げられ、宇奈月町教育委員会文化功労賞、北日本新聞地域社会賞、正力賞など、地方文化の功労による表彰を数多く受けられました。本願寺でもその能力が高く評価され、基幹運動本部員として招聘され、これからの宗門を担っていく中心的人物になるであろうと期待されていました。

病魔に襲われたのはそんな矢先のことでした。末期の直腸ガンと診断された雪山さんの心境はいかばかりかと思わずにはおれません。
「よりによってなんでこの私が・・」
「まだまだやりたいことが一杯あるのに、悔しいなー、残念だなー・・」
そうした思いが、深い絶望感と重なって、激しく心が揺れ動いたことだと思います。

たとえお念仏を喜ぶ身にさせて頂いても、親鸞聖人がおっしゃられたように「苦悩の旧里（人間世界）は捨て難く、いまだ生まれざる安養浄土は恋しからず」（「歎異抄第九条」）です。

「苦悩の尽きない人間世界であっても、そこを離れたいとは思わない。また、安らぎの世界であるお浄土へ急いで参りたいとも思わない」、それが私たちの偽らざる心です。

生きる未練を断ち切ることも、死への不安を乗り越えることも出来ないのが私たちです。

ところがです。
長年、お念仏に育てられた者は、そんな時、「煩悩の身を生きる私」というものをいよいよ明らかに知るのです。
それと同時に、そんな私をとっくに見抜いて「だからこそ救わずにはおれないんだよ」と、立ち上がって下さった阿弥陀さまの大悲心にこの私が間違いなく包まれてあることを知るのです。

阿弥陀さまは、死を目前にしてなお生への執着が消えない私に「そんなことではどうするんだ」とはおっしゃらないのです。「無理もない。妻や子供を残して死に切れるもんか。そのままでいい、そのままでいいんだよ」とおっしゃって下さるのです。
念仏者にはその「声」がはっきりと聞こえてくるのです。

死を前にうろたえようが、苦悶しようが、そんなことはどうでもいいことなのです。大事なことは「必ず救う」という阿弥陀さまの大悲心にお任せするということです。
その大悲心にお任せする時「かたじけないことです。もったいないことです」と心の底からうなづいていけるところに念仏者の生き様というものがあるのです。
「ありのままで救われる」とはそのことを言うのです。

しかも有り難いことは、私が帰らせて頂く「お浄土」は父も祖父母も皆、阿弥陀さまの大悲に抱かれて帰って行かれた所です。

そうだったのです。
「我がいのち」の帰る所には懐かしい人々が待っているのです。喜び勇んで往くのではないけれど、こんな心強いことはありません。

思えば、「人は生まれ老い病んで死んでいく」、その不変の真理である無常の理が今まさに我が身の上で起こっていたのです。お念仏に生きる者はそのことを通して、「我がいのち」の行く末がはっきりと定まるのです。
その揺るぎない安心感が、「こういうことや」という言葉に凝縮されたのだと思います。

その言葉を受けて、
「そうか、いよいよお浄土に帰らせてもらうか。娑婆はさびしくなるが、お浄土は賑やかになるなー。お浄土に帰ったら皆によろしく伝えてくれよ。わしもいずれ参らせてもらうからな、待っとってくれよ。お互いお念仏に出遭えて本当によかったなー」
　それが「そういうことか」という言葉に込められているのです。

「兄貴お先に失礼するが、またお浄土で会おうな」
「分かった。必ずお浄土で会おう」
　偉大な二人の念仏者はこうして大悲に包まれ、お浄土へ帰っていかれました。

雪山隆弘氏　平成二年九月十七日
　　享年五十歳　お浄土に帰る
利井明弘氏　平成十五年十二月八日
　　享年六十七歳　お浄土に帰る

平成16年4月　　「光明寺だより33号」より